「門上秀叡・千恵子コレクション」における厨子溶着煙管の検討

吉　田　健　太

1. はじめに

那覇市市民文化部博物館は、本年度に沖縄振興特別推進交付金（壺屋の歴史・文化発信事業）を活用し、沖縄特有の蔵骨器（厨子）のコレクション190基を購入した。今後、寄贈資料も含めたこのコレクションを旧所蔵者の名前を冠し「門上秀叡・千恵子コレクション」として、那覇市立壺屋焼物博物館において保管・研究および展示公開し、活用していく予定である。およそ190基にのぼる厨子甕は、多種多様であり、貴重な文化財として認識できるものである。当コレクションは今後、分析調査をおこないつつ、永きに渡り広く市民に公開し、那覇市の歴史普及事業の一環を担うものである。

今回、資料分類をおこなう中で、煙管が溶着した厨子甕を確認することができた。本稿は、煙管が溶着した厨子の報告と溶着した煙管の歴史的位置づけについて述べていくものである。

2-1 厨子甕の先行研究

まず、厨子とは何か。このことを明確にするために、これまでの研究状況を併せて概観したい。厨子は、沖縄における蔵骨器の総称である。沖縄では大量に確認され、祖先について考古学から考える上で有効な資料といえる。厨子は、死亡年代などが書かれている銘書、納骨している甕自体の器種、納骨されている骨など多くの情報を有している。

本来、厨子は「仏像・経巻を安置する両とびらの箱。単に書物や食物などをたくわえる箱」である。しかし少なくとも乾隆元年（1736）には厨子の名が「四本堂家札」に使用されていることから、この頃には厨子の名称が使用されていたと考えられる（浦添市教育委員会　1985）。琉球では人の遺骨を再葬して墓に埋納する習慣があり、厨子の分布は、一応奄美の島々から先島に至るまで、琉球諸島全域に及んでいる。しかし、その使用方法については地域差が認められる。沖縄内にあっても階層などで差異をつけることがある。支配層の間では、家を中心とする個別墓が発達し、厨子を個人または夫婦単位で使用することが一般的であった。

また、厨子には被葬者が死亡した年、納骨した年、墓に納めた年などが書かれている。これらを一般的に「銘書」と呼称している。厨子甕はそれをもとにした編年研究

よしだ　けんた（那覇市立壺屋焼物博物館学芸員）

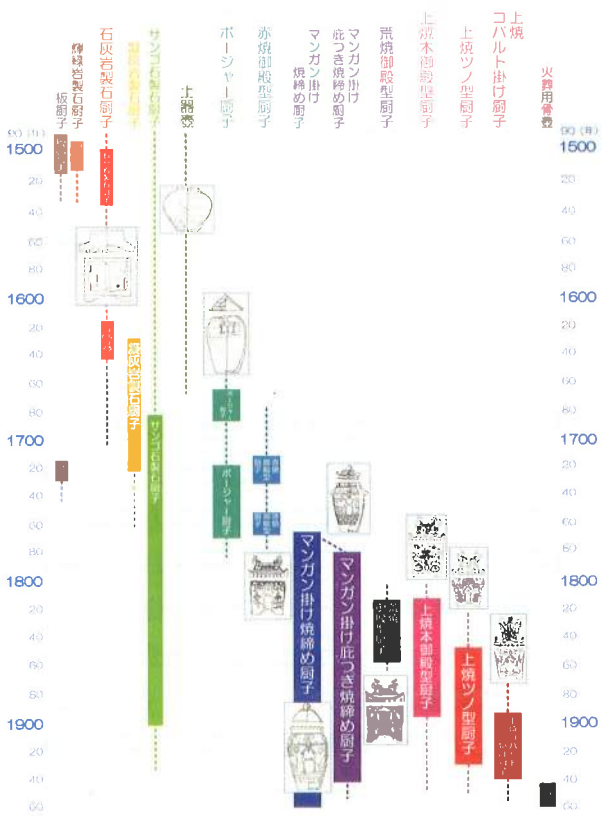

図1

が行われている。また、銘書が施された陶製の厨子は年代が分かることから、近世沖縄窯業史を考える上で重要な資料でもある。また厨子甕は、洗骨されて納骨された骨が収蔵されていることから、骨の残りがいいものが多くあり、そのことから形質人類学・民俗学からみても貴重な資料といえる。

厨子が研究対象もしくは報告されるのは早く、1888年に西表島を訪れた田代安定が骨を納める壷があると紹介したことにはじまる。ただし、以降は陶芸品や民具としての扱いが多く、考古学的調査は行われなかった。それは、厨子自体が現在を生きる人々の祖先に深く関わるものであり敬遠されがちであり、またどのような文化財的価値があるのかということが考えにくかったため、というのが背景として考えられる。

厨子に関する本格的な考古学的調査がおこなわれたのは、浦添ようどれにおける調査がはじまりである。これは1955～56年におこなわれた浦添ようどれ整備に伴う調査であり、調査の一環として収められた石製厨子の調査が行われている。調査の結果から、調査対象の厨子の製作工程を検証しているが、厨子の報告については美術史的な記述が主であった（琉球政府文化財保護委員会　1957）。以後、1980年代になると、沖縄県内における発掘調査件数が増加し、それにあわせて古墓を対象とした発掘調査も実施されることとなる。厨子における分類・編年の先駆けであったのが、名嘉真宜勝、上江洲均である。特に上江洲氏は、厨子を「素材・材質による分類」「器種や釉薬による分類」をおこなった上で、器種ごと普及した時期の上限・下限の範囲を厨子に記された銘書との照合を基本として設定し、厨子の時期的な変遷を提示してい（図1）。上江洲のつくった編年モデルは、以後の厨子の編年研究の基礎となる（上江洲　1980）。

以後の厨子研究は、器種ごとに研究を詰めていくこととなる。ボージャー厨子に関する編年研究を見ていくと、上江洲均は、眉が家屋を模し肥厚口縁部は丸みを帯びるのを古いタイプ、眉が小さく肥厚口縁が内彎しており無文であるのものを新しいタイプと分類した（上江洲　1980）。中村愿はボージャー厨子の眉に着目し、眉を大まかに7つに分類し、ボージャー厨子の眉は長方形で構成されていたものが次第に円や楕円に変化していくとした（中村　1989）。また金武正紀は各部位の計測値で分類をお

こない、17世紀末～18世紀初頭のものは器高50cm前後の中型で胴部の膨らむものが多く、18世紀初頭～18世紀中頃のものは器高40cm前後の小型で肩部が張るものが多いとした。また正面の眉は新しい時期に移行するにつれて庇の突出が弱くなるとした（金武　2007）。ボージャー厨子はマンガン掛け厨子と比較して、有する属性が少なく、甕正面の眉部分および甕の計測値が分析する上で対象となってきた。

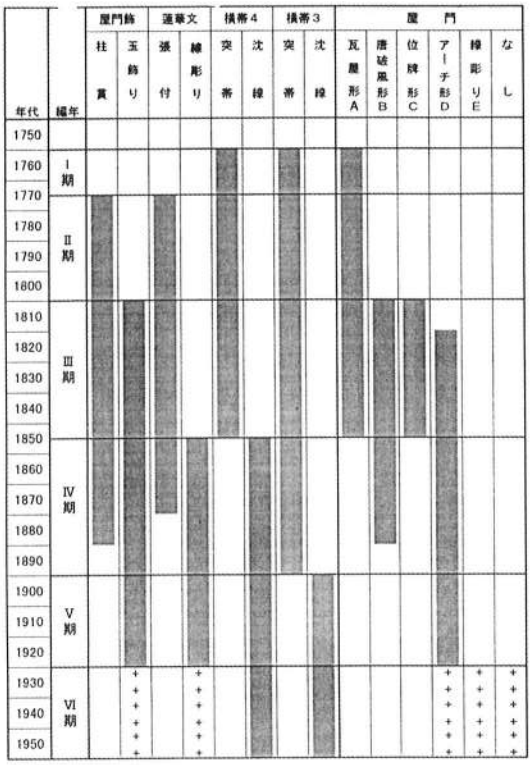

図２

またマンガン掛け厨子は、ボージャー厨子と比べて文様や装飾が増えることから、文様・装飾からみた分類が多く試みられている。上原静・下地安広は甕側面の蓮華文および屋門の屋根部分に着目し、分類を行っている。そこでは蓮華文は貼付けから沈線へ、屋門は屋根瓦を表現するものから屋根的なものを表現しないものへの変遷を述べている（浦添市教育委員会　1985）。中村愿の分析では口縁部断面の形状に着目し、長方形→三角形→バチ形状へと変化していくとした。（中村　1989）。安里進は厨子の身の装飾部分構成に着目し、身の装飾を3つの文様帯に分類、屋門の形状を4タイプに分類し、Ⅰ～Ⅳ期に区分する編年を構築している（図2）。そして、この編年区分も踏まえつつ、伊祖の入め御拝領墓、中城村津覇の呉屋家、浦添市前田の比嘉門中墓などで、被葬者の親族関係復元および当時の社会背景を考察している（安里　1997, 2003, 2006）。

以上のように、器形や文様に着目して、厨子甕自体の編年を組む作業は数多く行われている。しかし、分類をおこなっても、それを実年代にあてはめることは難しい作業となる。それは厨子甕のほとんどが墓から採集されたものであり、考古学の根幹となる層位からの年代判断ができないというのがある。そこで厨子甕編年と実年代をすりあわせるのに重要になるのが、厨子甕に書かれる銘書である。銘書くは、被葬者の名前、死亡した年、納骨した年、墓に納めた年などが書かれたものである。この銘書が考古学で言う鍵層の役割を果たし、基準となる。編年が実年代とあわせることにより、考古学の分類ははじめて歴史の中で意味を持ってくる。現在、銘書と厨子の年代のすり合わせが各地でなされている。報告・資料蓄積が待たれるところである。

2-2 厨子の概要

次に本稿で対象とする厨子について概観していく。今回扱う厨子は、那覇市市民文化部博物館が入手した「門上秀叡・千恵子コレクション」に含まれるものである。

現在つけられているナンバーで「K-8」としている甕型厨子であり、全体に飴色の釉薬が施されている。またその上に黄色（オリーブ色）の掛け流しが施されている（図3, 4）。内面にも施釉されており、上面は黒く発色、下方は褐色に発色している。産地は購入時、八重山焼[注1]ということになっている。本体のサイズは計測の結果、身の高さが57cm、口径27.5cm、胴径40.5cm、底径25cmとなっている。本体は頸部を形成し、肩はあまり張らない形をとっている。甕型厨子正面には「屋門」と呼ばれる装飾が線彫りで施されている。屋門の屋根は瓦屋形が線彫りで表現されている。屋門の窓の中には穿孔が3つ空けられており、菊花文と思わしき印が2点確認できる。屋門には柱及び柱貫のようなものは描かれているが、一本の線で描かれているため柱及び柱貫であるか不明である。柱と思わしきものの周辺には蓮弁文が線彫りで施されている。銘書面と呼ばれる箇所には、空白である。屋門に向かって右側には蓮華文が上下に二つ、線彫りで描かれている。同様に向かって左側にも右側と同様の文様が施されているが、こちらは釉が分厚いせいか、線がはっきりと確認することができず、ぼんやりとした描写となっている。横帯1と横帯2は突帯となっており、1・2の間には蓮弁文が線彫りで施されている。横帯3. 横帯4は、当製品からは見受けられない。形状としては屋門向かって左側の底部は、歪んでいる。また、溶着したものを剥がしたであろう跡も確認できる。そして、胴部に煙管の吸い口が4点、底部に煙管の雁首が4点溶着しているのが確認することができる（図6, 7）。

また蓋は計測の結果、高さ10.5cm、口径26.5cmのサイズとなる。庇の付け根部分にひびが入っているが、接合した跡がみられる（図5）。擬宝珠型となっている。釉薬は施されているものの、身とは異なる釉薬が施されている。一見したところ泥釉とみられる。外側は施釉されているものの、内側は施釉されていない。また内側には墨で銘書されている。銘書は時計回りに「乾隆五拾五年庚戌七月」と書かれており、中心部から端部に向けて、縦に二列「儀保筑親雲上男子」「かな儀保」と書かれてある。

2-3 厨子の検討

本製品を前述した上江洲編年（図1）を用いると、形状からボージャー厨子と考えられる。また金武正紀によるボージャー厨子区分（金武　2007）を当てはめれば、当製品は頸部がめいかくにったえいることより、陶製有頸甕型に分類することが可能となり、ボージャー厨子でも後半に位置するものと考えられる。また本体に施された文様は、屋門を中心とした描写が刻まれている。このような装飾は、マンガン掛け焼締厨子やマンガン掛け庇付焼締厨子などに多く見られる装飾である。そのようなことからマンガン掛け厨子の分類も考慮に入れることとすると、安里進の分類を用いることとする。安里によると前述したように装飾ごと項目を抽出し、Ⅰ～Ⅳ期に分類している（図2）。瓦屋形や柱貫が描かれていることを考慮すれば、Ⅲ期に当てはめることが可能である。またボージャー厨子の形状とマンガン厨子の装飾を併せ持っていることを考慮すると、18世紀末から19世紀初頭に製作したと考えられる。また本厨子の蓋には銘書から残っており、銘書の年代から解釈すると1790年に納骨もしくは没

したと解釈することができる。ただし、銘書と制作年代は必ずしも同じになるとは限らず、そのことから1790周辺の年代が想定される。

なお、同コレクション内に同様の釉薬を施されているNo.47がある。こちらは甕型厨子であり、装飾などを概観すると庇付マンガン厨子の特徴が垣間見える厨子となっている（図8）。飴釉が全体に施されており、その上に黄色（オリーブ色）の掛け流しが施されている。内面にも施釉されており、上面は黒く発色、下方は褐色に発色している。刷毛目などが随所に垣間見える。産地は購入時、八重山焼ということになっている。本体のサイズは計測の結果、身の高さが55.5cm、口径27cm、胴径37cm、底径22cmとなっている。厨子の頸部直下に庇がつけられており、これが厨子正面の屋門の屋根として形作られている。屋門含め装飾は全て貼り付けで装飾されている。屋門には柱及び柱貫が確認されて、屋門の両柱上部には獅子が施されており、屋門の窓の中には穿孔が3つ空けられている。柱、柱貫部分の内側には連弁文が施されており、菊花文が柱貫に3つ、左右柱に各2つ施されている。菊花文はスタンプ上のモノで施文したと考えられる。屋門の両側には法師像が左右2体の計4体が貼り付けられている。うち1体は完全にはがれており、貼り付けた跡のみ確認できる。法師像は4つともに、線彫りで描かれてた蓮華に載るカタチで装飾されている。また身の底部には蓮華文が線彫りで施されている。　また蓋は計測の結果、高さ13.5cm、口径28.5cmのサイズとなっている（図9）。擬宝珠型となっており、外面は身と同様の釉薬が掛けられている。なお内面は施釉されておらず、墨で銘書がされている。銘書は時計回りに「乾隆五拾五年庚戌七月」と書かれており、中心部から端部にかけて、縦に二列「儀保筑親雲上」「同人妻」と書かれている。

2つの厨子には「儀保筑親雲上」と書かれており、それをそのまま信用するのであれば、47に納骨されていた夫婦の子が、キセルの溶着しているK-8におさまっていたと考えられる。また書かれている年月はともに乾隆五拾五年庚戌七月であった。これは当事者がなくなった年代なのか、洗骨をおこなった年代なのか定かではない。しかし、この3名が同じ年月に亡くなったと考えるより、同じ年月に洗骨・納骨をおこなったとかんがえるのが蓋然性が高いと考えられる。厨子制作年代は「亡くなった」年代よりも「用いられた」年代により近いと考えられることから、厨子制作年代は約1790年を中心とした幅を狭める年代に設定することが可能であろう。

3-1 煙管の研究史

以上のように、煙管の溶着した厨子の概観を述べてきた。次に、厨子に溶着した煙管に注目していく。その前に、煙管について若干の概説とこれまでの研究状況を述べていくこととする。

煙管は刻み煙草用の喫煙具である。火皿・雁首・吸口からなり、中間をラオで接続している（図10）。「きせる」の語源はポルトガル語の「クシェル」に由来し、中間をラオと呼ぶのは、ラオスで産する斑竹を用いたことに由来する。沖縄においてはクサン竹の根の節の多い部分を利用して作ったものが、まっすぐで鉄砲に似ているとこ

図3　厨子甕（身）　正面

乾隆五拾五年庚戌七月
儀保筑親雲上男子
かな儀保

図5　厨子甕（蓋）　銘書部分

図4　厨子甕（身）　裏面

図6　溶着資料　吸口

図7　溶着資料　雁首

図8　no.47　厨子甕（身）　正面写真

図9　no.47　厨子甕（蓋）　銘書部分

ろからティッパーと呼ばれた。江戸初期の煙管は長く、葉の刻み方が粗いせいか火皿が大きく、火皿の下が大きく湾曲するのが特徴である。やがて喫煙の風が一般的に広まると、葉を細かく刻む技術が進歩したからか、あるいは携帯の便を考慮してか、これらの特徴は薄まって、同時に素材・形状とも多様になったといわれる。金属・木・石・陶器・ガラスなどを使用し、単なる喫煙具ではなく、趣味的・装飾的な要素が加えられるようになった。煙管は煙草のヤニですぐに詰まるから、たびたび紙縒（こより）を通して掃除する必要がある。そのために専門の修理屋が町を歩くようになり、これをラオ屋といった。しかし、明治5年に国産の紙巻煙草が製造され、これが全国的に流行すると、刻み煙草は次第に衰退して、今日では煙管をほとんど用いなくなった。

煙管は全国の発掘で出土しており、各報告書に資料が紹介されている。日本列島の遺跡から出土するキセルの大半は、分離型・金属製のキセルである。しかし琉球列島の遺跡から出土するキセルは、素材（窯業製品の場合は胎土・焼成）・形態ともに多様であり、その理解において特徴の生理と分類は重要なものとなる。

キセルが出土した遺跡の報告書では、これまでに様々な分類基準が提示されてきた。その基準は素材を主体とするものと、形態を主体とするものとに大きく二分される。琉球列島のキセルに関する初めての体系的分類は、古我地原内古墓の発掘調査報告書で示された。出土したキセルを素材に基づいて「石製」「陶製」「青銅製」に三分類し、さらに素材ことの形態に基づいて「柱状形」「釣鐘形」「パイプ形」に細分している。ここで設定された素材に基づく三つの分類名称は、現在に至るまで使用されている（沖縄県教育庁文化課1987）。一方、形態を主体とした分類案も提示されている。安仁屋トゥンヤマ遺跡出土キセルの分析では、まず形態から柱状形とパイプ形に分類し、

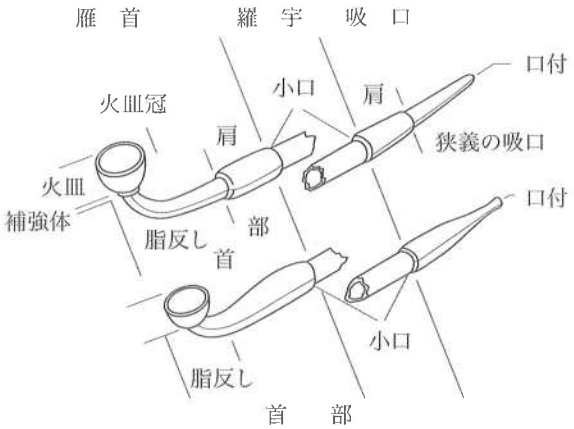

図10

さらに素材から細分する手法をとっている（沖縄県教育庁文化課1992）。現在の分類においては、前者の素材を主体とした分類が支配的である。

また形態と素材の組み合わせも重要である。パイプ形・無釉陶器形のキセルは多様な形態を呈するものの、脂反しがなく細長い肩部をもつという共通性をもつ。しかしこうした形態は他の素材のキセルにはみられない。パイプ形・施釉陶器製キセルやパイプ形・金属製キセルも同様である。琉球諸島においては、素材を越えた形態が確認される一方で、両者の組み合わせは概ね固定的であり、特定の素材から特定の形態が作られる傾向がある。そのようなことを考慮して、ナーチュー毛古墓群・銘苅古墓群出土キセルの分析では施釉陶器製の雁首のタイプを分類し、全体的に丸みを帯び首部が太くなるものをⅠ類、直線的で火皿部や首部を八角形に面取りするものをⅡ類としている（玉城2000, 仲宗根2001）。同様に無釉陶器・金属製キセルの分類を行っている。その中で、ナーチュー毛古墓群・銘苅古墓群ともに無釉陶器製の吸い口が出土していないことは注目される。また首里城御内原北地区発掘調査報告書内において、補足する形で3種に分類している（大堀2010）。円筒型で火皿のみでなり、古我地原内古墓報告書内で釣鐘形・柱状形に分類されているものを陶首Ⅰ類、全体的に角のない丸形の雁首で、脂返しに湾曲や角がみられず首もなく全長も短く、首里城の各地区をはじめ近世・近代の遺跡で頻繁に出土するタイプを陶首Ⅱ類、六角形や八角形をはじめ直線的で角をもち、脂返しは角をもち、首と肩が分かれないタイプを陶首Ⅲ類と分類している。また吸口は、小口から口付にかけて内湾するタイプを陶口Ⅰ類、口付から小口までの内湾が小さく、直線的で細長い形状をしているタイプを陶口Ⅱ類と分類している。しかし年代的な特徴を得ることができず、吸い口のバリエーションを提示するに留まっている。

それについては、キセル資料は古墓発掘に伴い出土することが多いが、古墓は層位的に不明確なこの画多く、考古学の基本概念である層位学的考察が難しいことにも要因の一つにあげられる。琉球列島の諸遺跡から出土した煙管に関しても、石井龍太により基礎的研究と称してこれまで出土したキセル資料を概観・分析して、文献資料に見られるキセル記述ともあわせて考察しているものの、分類をしたとはいえ、それに基準となる年代が付与されない限り、煙管資料の年代が捉えるのが困難であったとされている(石井2011)。江戸の遺跡発掘資料をもとに構成した編年案を援用して年代を絞るものの、近世の発掘資料ゆえに絞り切れずに歴史的位置づけが困難な状況にあるといえる。

3-2 厨子甕溶着の煙管資料の概要

底部付近に溶着した雁首について概観していく。雁首は4点確認される（図7）。形状として確認できるのは4点であるが、4点のほかに雁首の火皿の溶着箇所が確認できる。そのことより少なくとも５点並べて窯入れをしていたと考えられる。胎土は白土で、外面は灰釉が施されている。内面は無釉である。口の数箇所には石灰と思われるものが付着している。煙管雁首の形状は玉城・仲宗根の分類によれば雁首Ⅰ類、大堀の分類によれば陶首Ⅱ類に分類される。また雁首の下には他の製品が溶着したと考えられる跡が確認できる。黒釉が確認することができることから、窯道具上に雁首をのせ焼成したと考えられる・器種については不明である。

次に溶着した吸口について概観していく。吸口は胴部に4点溶着しているのが確認できる（図6）。ただ、雁首と同様に形状として確認できるのは4点であるが、4点のほかに吸口の口付部分と思われる溶着箇所が確認できる。胎土は白土で、外面は灰釉が施されている。内面は無釉である。煙管吸口の形状は大堀の分類によれば陶口Ⅰ類にあたる。また吸口の下には他の製品が溶着したと考えられる跡が確認できる。黒釉が確認することができることから、窯道具上に吸口をのせ焼成したと考えられる・器種については不明である。

4. 小結・まとめ・今後の課題

最終的に、煙管の年代と厨子の年代を合わせてみることを試みる。前述したように、厨子の年代は銘書に書かれている年号と厨子編年を合わせて考察して、1790年の周辺と設定した。そのような年代であることから、溶着した煙管は同様の年代のものと設定しても問題はないと考えられる。現在、沖縄における煙管の分類は為されているものの、それが編年と結ぶことはなく、おおよそ18～19世紀もしくは近世・近代と大枠で設定することが多かった。それは考古学的な近世遺物を考える上で、細部にわたる年設定をできないという弱点というべきものであろう。ただし今回、年号が絞り込める厨子に溶着した資料が発見されたことにより、当資料が琉球諸島における煙管編年に絶対年代をあてはめるのに有効な史料となりうる可能性を提示できると考えられる。

また煙管の編年を構成することは、琉球における煙草の歴史を解釈する一助となりうると考えられる。煙草は中南米大陸原産の植物であり、大航海時代以後に世界中に広がった農作物である。日本にタバコの種子が伝わったのは慶長年間とされている。南九州の薩摩にも早くから伝来し、「薩摩煙草録」によると、日本における煙草栽培の発祥の地は指宿と指定され、大隅国分では1606年に栽培が始まったという。なお、これより先、1603年から３年間にわたり琉球に滞在した袋中上人の「琉球往来」は、「煙草事、右、南蛮国より出て諸国に入る」と記しており、南蛮渡来のタバコが琉球でもすでに知られていたふしがある。琉球列島に煙草が流入したルートとしては、中国からの流入が経路の一つとして考えられる。「食物本草」や「畑譜」といった明代

の記録によると16世紀末ごろ福建商人によって中国へもたらされ、急速に拡がったという。当時、福建商人は琉球にもさかんに往来したから、福建系渡来人の多い久米村あたりに伝来したことも十分に考えられる。琉球国由来記にも煙草の記述がされている。しかし、煙草の記述については薬物的効能の記述にとどまり、その伝来事情については判然としていない。万歴年間には薩摩から琉球へ伝来して煙草栽培が始まったともいわれるが、あくまで推測の域を出ないのが実情である（真栄平1996）。

また琉球における煙草の普及については、18世紀には男女ともに広く普及している記述が多く残されている。あまりに普及して、その弊害を厳しく指摘する見解もあるほどである。「球陽」尚穆王二十年（1771年）には首里城の一部に時事実上の「禁煙令」が導入されている。禁令の主旨は、首里城の儀礼空間における喫煙マナーの遵守に主眼をおいた禁令といえる。だが、一方では国王と役人の謁見のときすらこのような禁令を出さなければならないほど喫煙習慣が蔓延していることを示す例であろう。また需要の高まりにともない、琉球王府は煙草の自給化路線をめざすことになる。1745年（乾隆10年）、首里寒水川村の金城和最筑登之親雲上が王府の田地奉行に提出した「耕作方相試田地奉行へ申出之条々」では、煙草作りを奨励している。また「西村外間筑登之親雲上親書」でも、煙草に適した土質改良や施肥法などが12ヵ条にわたり詳しく解説されている。琉球の農書が煙草栽培のノウハウを懇切丁寧に指導していることからも、王府が国内の需要の高まりと自給化の必要性を意識していたと考えることができるだろう。

ただし、文献記録において煙草の記述は確認できるものの、17世紀前半をさかのぼるものはなく、また煙草というおおまかな表現のみであり種類など特定をするのは厳しい状況にある。政策などについては文献記録と考古学的資料として数多く出土している煙管を合わせて考えることにより、17世紀以後の琉球王国内の状況の解釈する一角度となると考えられる。今回の年代が絞り込める煙管資料が詳細な年代を明らかにすることができた稀有な事例と捉えてよいであろう。当資料をあわせた琉球の煙管研究については、また稿を改めて論じていくこととする。

本稿をまとめるにあたり、倉成多郎氏、石井龍太氏、徳元剛氏、翁長正行氏には御教示・御助力を頂きました。末筆ではありますが御礼申し上げます。

引用参考文献

安里進　1997　「伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者　-近世墓の考古学的調査による家族復元－」『浦添市文化財研究調査報告書』　第25集　浦添市教育委員会

安里進　2003　『中城村字津覇・呉屋家の墓被葬者の家族復元』浦添市教育委員会

安里進・新里まゆみ　2006　「比嘉門中墓の家族史　-家族の数だけ歴史がある－」『浦添市文化財調査研究報告書』

石井龍太　2011　「琉球列島出土キセルの基礎的研究　琉球喫煙文化の研究」『東京大学考古学研究室研究紀要　第25号』東京大学考古学研究室

上江洲均　1980　「沖縄の厨子甕」『日本民族とその周辺　歴史・民族編』　国分直一博士古希記念論集編纂委員会
浦添市教育委員会　1985　「チヂフチャー古墓群調査報告書」『浦添市文化財調査報告書』第8集　浦添市教育委員会
江戸遺跡研究会（編）　2001　『図説江戸考古学研究辞典』　柏書房
大堀皓平　2010　「第16節　煙管」『首里城跡　御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）』沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書　第54集
沖縄県教育庁文化課　1987　『古我地原内古墓　－沖縄自動車道（石川－那覇間）建築工事に伴う緊急発掘調査報告書（7）』
沖縄県教育庁文化課　1992　『安仁屋トゥンヤマ遺跡　－下級下士官隊舎建設に伴う緊急発掘調査報告』
金武正紀　2007　「考古学から見た銘苅古墓群」『銘苅古墓群』那覇市文化財調査報告書第72集　那覇市教育委員会
玉城京子　2000　「第13章　煙管」『ナーチュー毛古墓群　－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅶ－』　那覇市文化財調査報告書第44集
桃原茂夫　1983　「煙管」『沖縄大百科事典　上巻』沖縄タイムス社
仲宗根啓　2001　「第5節　煙管」『銘苅古墓群（Ⅲ）　－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市文化財調査報告書第50集
中村愿　1989　「墓の形態と厨子甕のタイプについて」『南島の墓』沖縄県地域史協議会
那覇市立壺屋焼物博物館　2005　『銘苅古墓群　－蘇った先祖の眠る大地－』
那覇市教育委員会　2001　『首里崎山古墳群　首里崎山公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告』那覇市文化財調査報告書第47集　那覇市教育委員会
日本民具学会（編）　1998　「キセル」『日本民具辞典』
長谷正視　1983　『沖縄・たばこの歴史　－戦前編－』（財）たばこ総合研究センター
真栄平房昭　1996　「煙草をめぐる琉球社会史」『新しい琉球史像　－安良城盛昭先生追悼論集－』　榕樹社
吉田健太　2010　「系図・家譜と考古学　－厨子甕分析を通して－」『系図・家譜と祖先認識　－東アジアの中で考える－』琉球大学史学会第43回公開シンポジウム資料集
吉田健太　2011　「厨子を通してみえること　－考古学的成果と課題－」『壺屋焼物博物館紀要　第12号』　那覇市立壺屋焼物博物館
琉球政府文化財保護委員会　1957　「浦添ようどれ」『指定文化財解説』1956年度版琉球政府文化財保護委員会

図出典

図 1　那覇市立壺屋焼物博物館　2005
図 2　安里　1997
図 3　徳元・翁長氏撮影　筆者加工修正
図 4　徳元・翁長氏撮影　筆者加工修正
図 5　筆者作成
図 6　筆者作成
図 7　筆者作成
図 8　徳元・翁長氏撮影　筆者加工修正
図 9　筆者作成
図10　江戸遺跡研究会（編）　2001

[1] 黒石川遺跡発掘調査において報告書を見る限り煙管は出土していないため、煙管が溶着しているK-8資料は、八重山焼と捉えるべきかは疑問を呈する。しかし、現在分析・分類作業中であるため、本稿では「八重山焼」の表記することとする。